

K  
209.5

デワ

3

出羽太平記

三



出羽太平記卷之三

目録

上野山城主満兼被奥羽列照宗松本合戦  
之事 附勇太右衛門宗興羽羽列義光和略

里見氏部送心之事

満兼生害之事



里見内親王如喜子陸奥列後行軍  
所里見助四郎主君親之讐討事  
延澤城至日控社登守滿延勇力

K 209.5  
D  
3

滿兼被照宗松原合戰事附  
照宗與義光和睦之事

去程之山形より二里南上山より所行  
王城至里見兵部より滿兼と義光と  
互に中石和より或内滿兼里見内親  
王同民部其亦所行其と集市中より  
義光知より由我義光より和利  
独より義光近隣と表所切取

ゆゑ由天童へ頼高と素直なるれり  
高は頼高の弟と定むは保一も押寄道  
えより上は是れ少地の事なるべし  
悟をもつて敵討迄成りしは仙臺  
照宗も義光の妹婿とて之は腹の男  
子ゆゑもいふも日耳義光といふは  
西海をたぐはしき人なりと此人  
頼高加勢と請ひ下宿をたまはんと也

あつたは河へもけしは里見の  
得るもは照宗も大勢の如きなり  
光公上山の道へ出逢あるも照宗の  
軍勢は信濃陣にあり味方の兵  
を敵に奪ひし休むもいふも  
秀とて國に勝利を得ん事頼ひ  
し言上はこれ満兼頼高は  
則照宗も下使者をまはる

五席より今のをまへに文術英則ふ  
入り照宗公小休を捧ぐ長書一日

怪来社を影に筆中一紙を後

ハ筆先と云ふ初影と云ふ年

耳依中宿の此書結ハ母書

如又 此らと云ふ先か云ふ由り

中をまへに因ら出の宿在のん

と云ふ事と云ふ事日ハ年次第為金

二一ハ坊利ハ中道ハ宿願ハ  
甲申懐筆を國中ハ宿願ハ  
宿願ハ云ハ云ハ五階ハ  
降ハ云ハ此ハ云ハ生ハ  
月ハ云ハ云ハ云ハ由ハ  
云ハ云ハ云ハ云ハ

月出

甲申年

照宗公の門

上

河原守の書

一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...

一書に云く

一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...  
 一書に云く... 照宗公の門... 河原守の書...

勇列

河原守の書

羽衣物語

羽衣物語

と書ゆゑにさうして備忘料に記すべし  
用をせしめて俄に陣を遣はさるるは  
おの大本を伐倒し遂に本を以て  
出陣を待たせし早に事ごとく  
ても義光公の御子の伊良子彈正宗  
平とめを御宣ひたるはたなはと都立

一味してはさし押ふる由然に先は  
成作の志城の道しと名急に成作は  
乃道力に口を名急に成作の志城  
凡ておんといはれしもの先必にさし  
相より外に出るるはさしと名急に成作  
の大將といへば見れば成作の志城  
北条能成と志村能成の首領志城  
是れと平野合を以て名急に成作

者たし約百二十三百余騎陣中より余  
城の守り相と曰一のり遠方より  
は西の山より入るは成陣の陣の南  
中より二里南上りより目と南と七半  
丁より南へ山形より山への性遠松を  
りめより一里程東に城の守り陣  
たり南の細路あり東より山田の山嶽あり  
て際一里とありあり城の概要書

園中より約あり一里ありとあり  
余路より一里ありとあり  
と中より一里ありとあり  
と二午二分一とあり松原より奇とあり  
ハ山より東の川路ありとあり  
とありとありとありとあり  
とありとありとありとあり  
軍兵攻陣の時二所を考へ思ひよ



方より味方の休兵一面に罷り出さるる  
追原を電に訪るるも侍もあらずと云ふと惣に  
切所へ追入進出討をなす一と申すも是は  
照宗公は弟と同し満蒙に出入り侍らせたる  
比は文源之身は自ら言ひ給ひ侍り  
奮白にわの古氏を討ちて成兵の機  
要害を破るの事なき事あるはひては  
借第に白く宣ひしるるを款と侮り侵入

一を懐家一申の凡我光の内は智勇  
備り侍りし事強し南進の成  
てい成兵を大夏より入るはとて人余り  
七旬と云ふ道忠を遣り又お守とて六才  
余り侍るは宗牛と遣はし事ハ弟光の  
心を推し進めし事ありて方の流  
行の事ありて前後に辨つた付とてお守  
とてお守とてお守とてお守とてお守とて

の付第...  
の老人を...  
の推...  
の...  
又...  
の...  
の...  
の...  
の...  
の...

能く...  
田信玄の...  
と名...  
子...  
の者...  
か...  
光...  
ら...

やうのりけとバ借事しんる。義光は是れを  
付てうらうらとあはれおれ上山と  
出陣のふは山守しんあを休まらるる  
軍を奪取せバ利ありとほしと存心義光恩  
まあつくしんる。及高の陣に如替持越すの  
勇にあらく出せば中途中に陣を反つた  
ゆゆい水にまればあまし海にふた何をも  
歌の節にあらくゆつた。及高は味方と

大將を<sup>とつた</sup>あつたしんる。欲は謀るるとは軍  
とをすしんる。及高は味方とあつたしんる。及高は  
云早にあらくあつたしんる。及高は味方とあつたしんる。及高は  
弟をあらくあつたしんる。及高は味方とあつたしんる。及高は  
と各三をあらくあつたしんる。及高は味方とあつたしんる。及高は  
と成陣成るのれと退散しす。及高は味方とあつたしんる。及高は  
くおまらるしんる。及高は味方とあつたしんる。及高は  
弟と同しんる。及高は味方とあつたしんる。及高は

合ヶ満兼光陣死し海とて既とむ  
かふを後々山形義光も氏家茂隆守  
日蓮社も志村伊豆守正勝を討ち殺  
日蓮山内國備も同大和守等と物とて  
て介仰從軍してとる集軍一評定者  
々々内氏家茂隆守も信をたすもる  
既々大塚方押寄せしと陣内日蓮廣忠  
業の事とるも内氏家の係とも不知と

上山と深と妻のいんり毛を物とる意  
の酒と本と物と一歩竹田家と一  
ゆゑ海へは都成津の城に妻うらむ是城  
こは道忠宗牛を電主の約は五日十日は  
有成成すゆゑ人部をたすもゆゑは老願  
その幸ひもさば遠く人後作有内外と  
携る名録とすも日部を定む信置と引  
退らんす所南より一年の好とありとる

いひつゝ  
東の國の國々も  
正勝利ありと  
押へ玉に  
正陳厚い  
為一  
者立  
こし付  
中  
中

登守  
徳  
人  
風  
相  
と  
撰  
能

名をよむはみちるる流引奉一月山折のり  
五寸櫃月刀柯の中人守者をもよふたり  
下部を扱せりるの立例の條の棒を聚  
治むる難也とて毒の山せれり  
の紋有りて薩一流と云ふるに海馬を形  
能なるを押しあうりて海馬より下北  
るん中の田舎を扱ふ人の名を体たり  
氏名は後任者の法絶に白提りてその長兵

卒七百金流五身一々寅の利と云ふ  
いなるを池のいなるより十丁北の在象所  
谷地へ扱へり義光公の螺産古靴をよ  
立物御間御進とて御組とて人侍陸山平  
六芥池とて正親朝臣野口池の細木山平太  
法能を留下水を布小筒六百挺稻多積魚  
井上御所徳宗公治つたる年久遠は内海  
金平の岩傍の而夫徳藤屋の長風守相

日向國を以て勝亦丹の弓を百後法利の  
奈須河の好田也高伴山ゆを言ふ者  
流大徳二流は馬廻十八例に無人能と  
戦ひの右を有する強ひのこの大目山あり  
長月の能物な後たを喰へ卯の刺は  
蒼澤といふ名あり流有るの島を伴  
然るに款もろわと山をおる是は  
向ふと由介候の者若しやうもをばら

討平ん建融川をお勝一二三十一の門傳  
陣所を名物と云ふ物あり一を名あり  
日能法を名あり一軍兵を名ありお成沃の腰  
口へ松原ありお入の河を流し清きなり  
早も松原を名あり行きの先入陣又百金騎  
原へ馳入中を名あり一岡を伴る山形  
も虎声を入るを名あり一入るれ中を名  
一とを相殺ひまの年ありと云ふ

息を遣はらん進軍は後陣の備置に介  
せん引くはる照宗をよ見かひ先年を武  
陣入習れとて菜捲りたる御陣は多きを  
何義光公の御陣は御軍の左衛門を撃つる  
進一と約するは公一なる御軍の腰に在  
りり照宗の御陣を移りて身と御陣は  
つ習く<sup>ちめあひた</sup>御軍の御軍に御軍は  
この御陣は御軍の御軍に御軍は

御軍の御軍は御軍の御軍に御軍は  
東崩れとて御軍の御軍に御軍は  
能登守を御軍の御軍に御軍は  
噲張飛が御軍の御軍に御軍は  
惟子とて御軍の御軍に御軍は  
重なる御軍の御軍に御軍は  
御軍の御軍に御軍の御軍に御軍は  
御軍の御軍に御軍の御軍に御軍は



と掲げ八寸計有る。真意もこのを  
選す。相地齋翁の執を主ニラリトあり  
大音とてヤルかたあまの人のまきまの  
まはるるをこの目よとて義光公の  
はのちあるをこの目よとて義光公の  
能く書ける所延と申すの我之は疾の株正  
のちとて延と申すの我之は疾の株正  
の中と書ける所延と申すの我之は疾の株正

らとて延と申すの我之は疾の株正  
一陣まゝの延と申すの我之は疾の株正  
石見守とて延と申すの我之は疾の株正  
西を合とて延と申すの我之は疾の株正  
能く書ける所延と申すの我之は疾の株正  
眼を延と申すの我之は疾の株正  
上とて延と申すの我之は疾の株正  
の目とて延と申すの我之は疾の株正

はらへしあまのついでに日知社社歌をうたふてはは  
果ハ惣家公の歌の子を田八郎と名を  
このころはイハ見事とて入ん進平文字の  
社傳ハ家々くは満延をさうとて  
軍卒の中より人々をいあはして  
なれしをい出せんと進平をい一部  
馬と一苗はくはんがとわたり山田をい  
もろもろなまをい小勝を折て即とては  
一節

兵衛ハ家々さんとする後を例の孫の棒  
取延を白と對して田ハ家々をい首を  
咽とわだれもあはさる後をいさるは  
んを歌傳をい若く是つひとわたりは  
進平をいさるは海とては天傳をい  
満延をいさるは陸をい惣家公ハ家々をい  
村田と市と者さるはとては家々をい市長をい  
おとろくはとては社傳をい此とては陸をい

百近付ぐかゝる市街の如く其をミナリと  
外一社也と言ふが書年ハミシスリとよる備  
延ハ子利成老を押し長口ハミんで控  
て返中棒言の面を様々拂ひたれぬ事  
よきおき海にせきつゝ味方の兵を  
ミシヤハ討つゝや能や成とて勝とて  
固と作一は物ハ酒の年の味方の思ふ  
山を系下ハ討つゝと結ぶるぬた

扱一奥州様下ハ松東の國ハ急  
とて堅江ハハ酒の年の味方の智南  
討つゝ入松東言物ハハ者ハハ後  
馬居取ハ引退んとあハハ南ハハ  
月せんとお後通をまハハお物ハ  
成沢の城ハハハハハハハハハハ  
騎引率ハハ東ハハ討つゝハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハ

味方を以て我を以て國を以て人  
を以て人として行はざるは此の  
世に上り下りに便く仕るべき  
事なりと云ふは其の意は  
この世に生れしとて人の行  
尾海を以て國に以て人を入  
傾を播くは其の國に以て人  
尾海を以て國に以て人を入

カ  
顧と親付るを以て子を以て  
と遊りて遊ばしむる余り  
自を以て遊ばしむる余り  
向ふては信代の名を以て  
お付たるは信代の上の  
尾海を以て國に以て人を入  
伊予子家年一と云ふは  
孔を記しむるは余り



陽陰なきことありてはかゝる後と異洲崇宗  
このはるる者たまたまを伴ひて張興とあそび  
夜を日とせしむと上とを身とあひ結ば  
の正と海何百と思ひてくはるの正  
然れども海にたると我々の船りとも  
顧ず海にたると我々の船りとも  
上希ちる正遊と云の利正身も弟光は  
正光と云ふ呼のい我存生のあくお遠

ひやくと云ふ義光と申結と云ふ  
日遊と云ふ初女の正宗と申  
いづれかあひ道と云ふのあくああり  
徳い上希結と云ふ味と云ふ身と云ふ  
あつてはたまたまあつてはたまたま  
義光の心を海にたると我々の船りとも  
の厚期と云ふ思ひと云ふ徳と云ふ  
たつてはたまたまあつてはたまたま

はらわすの雲ありてははる見作下る  
— 山をながむる雲のふりてははる見作下る  
と高きとせしむる方と矢とあるもの  
うそとて急ぎに陳引あるもの  
は第一に中しなくは先づつらうと後とて  
はるに掛く程のし候とてうら— 雲  
なる世宗とて田の原をよはは誰とて  
別れとて— まこと— 田目か— 海陣と  
と思ふもお市もとてははるしは今の  
心中に納むてあるははるしは海陣  
形にお城義光とてははるしは中し海陣  
雲別とて陳引あるもの海陣に候ひて  
山形とて義光とてははるしは中し海陣  
は信とて何れ遠候とて新八國のものを  
飯合とて十方のものをははるしは中し海陣  
ゆかりとて早くとてははるしは中し海陣





あるに、<sup>いふ</sup>一<sup>し</sup>を<sup>あ</sup>ぬ<sup>る</sup>也<sup>ん</sup>照<sup>ら</sup>す<sup>る</sup>も<sup>つ</sup>と<sup>し</sup>て<sup>も</sup>是<sup>れ</sup>は<sup>ひ</sup>た<sup>た</sup>か<sup>る</sup>べ<sup>し</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
照<sup>ら</sup>す<sup>る</sup>も<sup>つ</sup>と<sup>し</sup>て<sup>も</sup>是<sup>れ</sup>は<sup>ひ</sup>た<sup>た</sup>か<sup>る</sup>べ<sup>し</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
凡<sup>そ</sup>の<sup>し</sup>ん<sup>が</sup>く<sup>の</sup>科<sup>の</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>び<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>す<sup>べ</sup>し  
不<sup>ふ</sup>得<sup>ず</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
一<sup>し</sup>を<sup>あ</sup>ぬ<sup>る</sup>也<sup>ん</sup>

里見氏部 逆心之事

其後義光公氏家尾張守伊良子宗平

日野社奉行守とてとてはたの合戦とて  
の智恵とては<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>し<sup>る</sup>也<sup>ん</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
退<sup>ひ</sup>き<sup>か</sup>へ<sup>る</sup>事<sup>も</sup>あり<sup>し</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
神の擁護<sup>ようご</sup>と<sup>も</sup>思<sup>ふ</sup>ふ<sup>べ</sup>し  
陽<sup>やう</sup>の<sup>し</sup>ん<sup>が</sup>く<sup>の</sup>科<sup>の</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>び<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>す<sup>べ</sup>し  
神<sup>かみ</sup>の<sup>し</sup>ん<sup>が</sup>く<sup>の</sup>科<sup>の</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>び<sup>あ</sup>ら<sup>は</sup>す<sup>べ</sup>し

すーイヤハ物之上山ノ押者満家新  
西伯一と有るん氏家尾張守をとも  
山神定江をくはるた満家が御ホ三里見  
日影の西回民部とて隠れたるお割のその  
おまよひて命の正奉お後長をなぬお  
まの多く申せし得は只一人のとおおとて早  
まき後殿すたきいもたてし中まさんぬ教日  
を透るる照家おまは和歌上りの如き

何と色一とも是んてと思てあ種と謀簡の  
得るを用人の兵を司ひたりとて退治然  
るたきと存ぬ某が正使のあまの者た家  
いも一上山の僧曰すておまをの日は里見  
兄弟いよ出入仕の御家内いあ人のあだ  
取もて因縁のちをあらはせ道を信る者  
ゆよ一有る民部い御曾あつたのちれま  
古今秘伝とていも秘傳とていものえりか



戸徳がはな氏家尾徳守市<sup>ひ</sup>子<sup>た</sup>音<sup>ふ</sup>あつゝ  
昭<sup>あ</sup>の<sup>ま</sup>使<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>せ<sup>り</sup>て<sup>は</sup>中<sup>は</sup>御<sup>と</sup>義<sup>と</sup>光<sup>と</sup>公<sup>と</sup>を<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>  
此<sup>の</sup>海<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>と</sup>す<sup>と</sup>そ<sup>の</sup>徳<sup>と</sup>を<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>  
若<sup>し</sup>抑<sup>え</sup>て<sup>は</sup>道<sup>を</sup>し<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>武<sup>を</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>抑<sup>え</sup>て<sup>は</sup>  
と<sup>も</sup>疑<sup>ひ</sup>ら<sup>れ</sup>り<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
仁<sup>に</sup>忠<sup>に</sup>孝<sup>に</sup>は<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>仁<sup>と</sup>孝<sup>と</sup>は<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>  
今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>の<sup>名</sup>御<sup>を</sup>た<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>抑<sup>え</sup>て<sup>は</sup>  
成<sup>さ</sup>す<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>の<sup>徳</sup>  
と<sup>も</sup>疑<sup>ひ</sup>ら<sup>れ</sup>り<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>

と<sup>も</sup>疑<sup>ひ</sup>ら<sup>れ</sup>り<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
後<sup>に</sup>は<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>の<sup>名</sup>御<sup>を</sup>た<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>抑<sup>え</sup>て<sup>は</sup>  
成<sup>さ</sup>す<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
と<sup>も</sup>疑<sup>ひ</sup>ら<sup>れ</sup>り<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>の<sup>名</sup>御<sup>を</sup>た<sup>も</sup>た<sup>り</sup>て<sup>は</sup>抑<sup>え</sup>て<sup>は</sup>  
成<sup>さ</sup>す<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>  
と<sup>も</sup>疑<sup>ひ</sup>ら<sup>れ</sup>り<sup>と</sup>も<sup>し</sup>て<sup>は</sup>一<sup>は</sup>今<sup>を</sup>も<sup>た</sup>り<sup>て</sup>

大將を討ち居防くたき要害より伏見  
には度々兵隊目と見たりと云ふに  
せん軍勢ひかへ難然れども  
兵隊に武士の甲をこぼれ又勇を  
のぞき人々勝を度め降参りて  
西原を奪り大後指しをせし  
るる不意なるに思ふも都落ち  
事ハ取捨難事と云ふに付れん

より御使参りて是れ中へ参りて  
ももろく凡そ身立を以て二つを  
と仕立しむるに内務省の御使  
方小坂方と云ふは先角の同者  
にござりて是れは都落ちの  
と云ふは後右の御使と云ふは  
大坂御使と云ふは凡そ上山の中  
て先角の御使一日七部討ち









源義光判

甲申年五月

備前守源義光の御書  
中略 我々の取次は先公の御  
入道は御書に御裁仕る事候  
と信の厚意なりと存候と御書  
百一 是も御書の引合とせ

上は御書に由りて御書に無  
えは御書に御書に可御書  
前々御書の御書に御書  
御書に御書に御書に御書  
御書に御書に御書に御書  
御書に御書に御書に御書  
御書に御書に御書に御書  
御書に御書に御書に御書  
御書に御書に御書に御書

てしるべの世の上は凡そ義光公を祀建  
物の先相相模守と云ふれ古に傳へ傳へ  
上らふは縁傳へ傳へ是の世に危し自然  
備はる民部と云ふの世に危し自然  
小民と云ふ。合はるるとは追はるは捕ら  
明日夜に入無きを程井里と云ふは未  
るもいふ。是の國中に相模守ありて  
うらまんと云ふいふれ相模守を畏るは

通中一教を不備事衆も病氣  
は此の中傳上は湯原住し一ヤルも  
山形言ひ民部と云ふの事初を  
より又より先相相模守の傳へは  
急死上は行中し

満兼は生害之事

左程く先相相模守の急は上は行民部  
討むし伝へる衆は行中し

山形をとも物<sup>たれ</sup>列<sup>せ</sup>し積兵三百騎<sup>あそび</sup>探<sup>あ</sup>り  
種<sup>たね</sup>地<sup>ぢ</sup>百<sup>ひゃく</sup>挺<sup>てい</sup>り<sup>り</sup>半<sup>はん</sup>儀<sup>ぎ</sup>由<sup>よし</sup>海<sup>うみ</sup>津<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>兵<sup>へい</sup>も  
種<sup>たね</sup>舟<sup>ふね</sup>作<sup>つく</sup>ら<sup>る</sup>忍<sup>しの</sup>び<sup>び</sup>お<sup>お</sup>物<sup>もの</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>る</sup>中<sup>ちゆう</sup>道<sup>だう</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>は  
医<sup>い</sup>社<sup>しゃ</sup>得<sup>とく</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>込<sup>こ</sup>び<sup>び</sup>え<sup>え</sup>津<sup>つ</sup>力<sup>りき</sup>の<sup>の</sup>兵<sup>へい</sup>を<sup>を</sup>獲<sup>と</sup>り<sup>り</sup>着<sup>ちやく</sup>  
五<sup>ご</sup>人<sup>にん</sup>傳<sup>でん</sup>へ<sup>へ</sup>体<sup>たい</sup>を<sup>を</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
中<sup>ちゆう</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>山<sup>さん</sup>形<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>第<sup>だい</sup>定<sup>てい</sup>念<sup>ねん</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>我<sup>われ</sup>由<sup>よし</sup>見<sup>み</sup>解<sup>げ</sup>を<sup>を</sup>は  
味<sup>あじ</sup>方<sup>かた</sup>に<sup>に</sup>た<sup>た</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>海<sup>うみ</sup>津<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>相<sup>あ</sup>物<sup>ぶつ</sup>言<sup>ごん</sup>  
及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>め<sup>め</sup>何<sup>なに</sup>思<sup>おも</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>

以<sup>も</sup>て<sup>て</sup>外<sup>がい</sup>氣<sup>き</sup>を<sup>を</sup>整<sup>ととの</sup>へ<sup>へ</sup>候<sup>こう</sup>を<sup>を</sup>在<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>  
陽<sup>やう</sup>寮<sup>りやう</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>行<sup>い</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>を<sup>を</sup>作<sup>つく</sup>ら<sup>る</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
魔<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>行<sup>い</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
し<sup>し</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>日<sup>にち</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>行<sup>い</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
二<sup>に</sup>心<sup>しん</sup>に<sup>に</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
尼<sup>に</sup>と<sup>と</sup>既<sup>すで</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>行<sup>い</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>  
括<sup>くわ</sup>く<sup>く</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>に<sup>に</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>易<sup>やす</sup>易<sup>やす</sup>

ハ松倉と下と信為頼りなると夫相相  
携ち携りて依りあす事の中をせしむ  
らんが依りて無一及と起りて由を供  
人きりて傳へた次の方々をたねしむ  
着しむの世に〜信為頼りてあすを  
のりてあす〜今存せしむりてあす  
色し〜と見れば〜と信為頼りてあす  
信為頼りてあすの信を信平内と〜

一が家々〜信為頼りてあす  
頼りてあす〜信為頼りてあす  
ま〜誓詞と〜の書とあす信為頼りてあす  
信為頼りてあす〜信為頼りてあす  
ま〜信為頼りてあすの信を信平内と〜  
くハ坪の信を信平内とあす信為頼りてあす  
今存せしむりてあす信為頼りてあす  
〜信為頼りてあすの信を信平内と〜

何の習なまもく様さまあまの宮みやの吐つしと  
有あらまが今夜このよき何所どこもんかたのとひ  
りれが平ひらのりいなる子の刺さすはん  
とちんれいぬい存ぞんも海うみへは休やすむをよ  
とく霞かすみや入い野ののくきをこの世よの所ところ  
と以後このちを思おもひさうを思おもひ後のち  
侍さむらいた信しんもとを平ひらのりかたを友とももひの外ほか  
と返かへび我われもい用もちの少すくななる平ひらのり

音ねの目め口くち教しよ入いとくお行ゆきも何なにも我われも酒さけ  
宴えんとゆん我われもい持もちたし酒さけも何なにも有ある  
由よしは海うみとちりあんと家いえひを平ひらのり  
い着きる人ひといもむにたむは何なにもあつたの候うら  
く唐からの母ははもあつたむは口くちもいひあつた  
而しかも友とも信しんかんもむを平ひらのり返かへびあつた  
よあく頼たのむとくそくもむを平ひらのり返かへびあつた  
か運うんの極ごくも知しるも平ひらのり返かへびあつた

仕備たりと詔ひ満乘の寝所をせり  
今更平くは寝外にせむは寝所をせり  
坐臥の儀にせむは寝所をせり  
其て返着せむは寝所をせり  
たつらむは寝所をせり  
伴の儀に相圖の寝所をせり  
ち甲らんは寝所に寝所をせり  
初めは寝所に寝所をせり

のまが平内少事とぬは言ひは入るなり  
一書に寝所に寝所をせり  
後七言の寝所に寝所をせり  
より矢相本種も満乗の寝所をせり  
我は義光の寝所も相種も光紀の寝所も  
部とりありては切形一首の寝所も  
り者も立仰りて是等首討元目かたし  
石を出し年々神を夜なり寝所をせり



以方昭夜備急内然而交付るる素心  
正使の大相相換守及急果能く振るれば  
又輕井原と正徳一、後兵六百余騎を以て  
とせしむるは上意を察し方門ありん在降参  
生いせし長考の正徳果たつてまはさる  
多ありと事子所降出りてあはれん  
可成ともましんせし正徳は由と彼は  
めあふんと詮糸區くぬるまは備果

ハ生害之杖柱も頼り内証而ハ付生  
と一民部ハ部ハ成然れば誰を大将と  
弓引はま由りしとこれありと後果正  
ふたりはらまなりしと在る相本換守  
らふそ介と備参仕へしと一民部守  
備とるまふし形の義充をより下る之也  
中後しこれハ信年ハ是非と及腹堂  
陽しとらまのめと看と一備果



主を付く一々道人の成る人と教すは他々  
 備り七口を一人は毎本と云ふはたゞ一人  
 指をあつて生れ甲斐は一人と云ふ除くこと  
 多りり是れ名相相模守に仕奉る内あ連  
 立向りあつてのつちとあつてが義孝公師  
 位は有る今信平内が働するは建退  
 治程とせしとて取成と物なりたればあつん  
 て進みと又尾張ちと極者あつてあつれ

今度其言傳の神ぬんとて願地を以て傳  
 有るとは程ありとて退かして程よく民神に  
 止形と云ふ傳一とて此禮の中をたればは約束  
 のごとく備當り成路より二百八年存りたれ  
 民神を以て里見成傳ちとてあつては上と  
 立向りたれ

日藏之助妻の奥州の座行り  
 附助四郎主君親の雙言を付り

里見然後守山形より三浦へ後守山  
りしち日花西子昔二人は自由西子美人  
阿比巴身出しお殺さんふかのわ新命義  
光ふより以伊と由花西子昔を傳と  
由伊をささるれ越後守をいよまらふ  
日花西子隱しきりあふた曲ふとふ  
居し新入時とふのあはは慶長奇為  
望御方ともとふわと福をわぬにや

日花西子日花西子あふまき人 貞江の  
あり保内諸勤のあはさる新に隠す  
下女一人あふし一はく思をさるれば二や  
日花西子形見膝をさる新に隠す  
あふし日花西子昔をさる自由あふ  
福江より由は守上との住おはぬと  
下女を日花西子昔をさる新に隠す  
より良し南より二里より南に本御村あふ

寺より此は唯々たるに頼むらん其の信持  
の如き一は信成ればさうとて一は信一里  
人かて信いむ言の信入重利に信ひゆへ  
里見が一粒をたづねて教を信とて信一  
仰りしり斯まて年月送りしりか内信由  
るた非人ありしり一人の男もたれぬ人  
しり里見助四郎とていひしりかみ信一  
勇後の信一しり成長し信ひ父か其も

るねんれば母を信と流し父か討てり  
こゝろに信りたれば初四郎とて信りしり  
の部たれば信一とて信後者とて左か討て  
父の信を信とんと山形とて入今信ひも  
我道守も信り用心とて信一とて信  
を信りしり信後者とて信一人あり  
皆男子とて信りしり信一とて信者とて  
しり信一とて信りしり信一とて信

山形<sup>いぬ</sup>に由<sup>いぬ</sup>後<sup>いぬ</sup>隙<sup>いぬ</sup>をくま<sup>いぬ</sup>云<sup>いぬ</sup>初<sup>いぬ</sup>り<sup>いぬ</sup>と<sup>いぬ</sup>勘<sup>いぬ</sup>辨<sup>いぬ</sup>  
<sup>あやふ</sup>知<sup>あやふ</sup>言<sup>あやふ</sup>紳<sup>あやふ</sup>海<sup>あやふ</sup>鳥<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>て<sup>あやふ</sup>御<sup>あやふ</sup>け<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>も<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>ま<sup>あやふ</sup>り<sup>あやふ</sup>  
く<sup>あやふ</sup>れ<sup>あやふ</sup>バ<sup>あやふ</sup>ゆ<sup>あやふ</sup>ら<sup>あやふ</sup>る<sup>あやふ</sup>に<sup>あやふ</sup>成<sup>あやふ</sup>た<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>ん<sup>あやふ</sup>申<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>心<sup>あやふ</sup>  
親<sup>あやふ</sup>教<sup>あやふ</sup>之<sup>あやふ</sup>臨<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>取<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>紳<sup>あやふ</sup>海<sup>あやふ</sup>鳥<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>も<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>ま<sup>あやふ</sup>り<sup>あやふ</sup>  
夫<sup>あやふ</sup>親<sup>あやふ</sup>教<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>取<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>紳<sup>あやふ</sup>海<sup>あやふ</sup>鳥<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>も<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>ま<sup>あやふ</sup>り<sup>あやふ</sup>  
山<sup>あやふ</sup>形<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
く<sup>あやふ</sup>形<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
と<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>ま<sup>あやふ</sup>り<sup>あやふ</sup>が<sup>あやふ</sup>子<sup>あやふ</sup>御<sup>あやふ</sup>有<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>山<sup>あやふ</sup>形<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
然<sup>あやふ</sup>初<sup>あやふ</sup>虫<sup>あやふ</sup>将<sup>あやふ</sup>友<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>相<sup>あやふ</sup>れ<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
山<sup>あやふ</sup>形<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
と<sup>あやふ</sup>付<sup>あやふ</sup>ま<sup>あやふ</sup>り<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
上<sup>あやふ</sup>山<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>自<sup>あやふ</sup>ら<sup>あやふ</sup>ハ<sup>あやふ</sup>山<sup>あやふ</sup>形<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
心<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
ま<sup>あやふ</sup>ハ<sup>あやふ</sup>入<sup>あやふ</sup>道<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>  
初<sup>あやふ</sup>日<sup>あやふ</sup>節<sup>あやふ</sup>を<sup>あやふ</sup>と<sup>あやふ</sup>云<sup>あやふ</sup>の<sup>あやふ</sup>区<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>門<sup>あやふ</sup>引<sup>あやふ</sup>男<sup>あやふ</sup>一<sup>あやふ</sup>人<sup>あやふ</sup>致<sup>あやふ</sup>す<sup>あやふ</sup>百<sup>あやふ</sup>奈<sup>あやふ</sup>



者をバる付取成らば正陽中(とら)に(とら)別(とら)一  
立ゆらむと(とら)皆(とら)奉(とら)り(とら)り(とら)て(とら)後(とら)正(とら)宗(とら)公  
傳(とら)仲(とら)重(とら)忠(とら)一(とら)正(とら)隆(とら)記(とら)仍(とら)ひ(とら)大(とら)板(とら)陣(とら)し(とら)と(とら)  
二三(とら)後(とら)年(とら)柄(とら)は(とら)る(とら)一(とら)名(とら)果(とら)は(とら)は(とら)ひ(とら)り(とら)て(とら)東(とら)海  
去(とら)氏(とら)公(とら)平(とら)と(とら)名(とら)一(とら)正(とら)宗(とら)公(とら)正(とら)朝(とら)有(とら)り(とら)と(とら)り(とら)  
即(とら)而(とら)是(とら)を(とら)見(とら)し(とら)西(とら)に(とら)正(とら)朝(とら)并(とら)と(とら)て(とら)別(とら)別(とら)  
立(とら)り(とら)正(とら)朝(とら)和(とら)泉(とら)の(とら)國(とら)に(とら)里(とら)人(とら)初(とら)都(とら)と(とら)名(とら)系  
此(とら)旗(とら)中(とら)を(とら)預(とら)け(とら)り(とら)九(とら)を(とら)後(とら)紙(とら)後(とら)書(とら)に(とら)正(とら)仕(とら)是(とら)

こたえられしを

日野能登守滿延の書

文保二年癸巳七月十二日正朝に列在(とら)る(とら)所(とら)  
酒宴(とら)の(とら)中(とら)に(とら)付(とら)て(とら)美(とら)相(とら)相(とら)持(とら)せ(とら)る(とら)所(とら)に(とら)ハ  
延(とら)隆(とら)社(とら)堂(とら)の(とら)の(とら)に(とら)信(とら)ん(とら)て(とら)持(とら)せ(とら)る(とら)所(とら)に(とら)ハ  
由(とら)り(とら)て(とら)正(とら)朝(とら)を(とら)國(とら)内(とら)に(とら)鶴(とら)の(とら)の(とら)の(とら)に(とら)十(とら)重(とら)の(とら)に(とら)  
成(とら)り(とら)て(とら)願(とら)ひ(とら)て(とら)持(とら)せ(とら)る(とら)所(とら)に(とら)ハ(とら)今(とら)に(とら)ハ(とら)由  
口(とら)物(とら)持(とら)せ(とら)る(とら)所(とら)に(とら)ハ(とら)義(とら)光(とら)公(とら)も(とら)た(とら)り(とら)て(とら)持(とら)せ(とら)る(とら)所(とら)に(とら)ハ

かひなきことの同好有るればいふに社せむ  
かむらさきんらあつとひをむすのあ  
大か上開一そのたす人撰あ何は湯  
帷子<sup>こひ</sup>と<sup>キ</sup>別世衆<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>作<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>存<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>社  
ち及鬼神<sup>カクシ</sup>之とも子車<sup>キ</sup>とのせん<sup>キ</sup>と鬼<sup>キ</sup>之<sup>キ</sup>成  
ま一我光<sup>カミ</sup>公<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>知<sup>キ</sup>社<sup>キ</sup>也<sup>キ</sup>吉<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>も<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>あ  
り<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>社<sup>キ</sup>也<sup>キ</sup>も<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>由<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>信<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>む<sup>キ</sup>し<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>む<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>信<sup>キ</sup>  
得<sup>キ</sup>ぬ<sup>キ</sup>こ<sup>キ</sup>り<sup>キ</sup>比<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>七<sup>キ</sup>月<sup>キ</sup>十<sup>キ</sup>八<sup>キ</sup>日<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>お<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>事<sup>キ</sup>ぬ<sup>キ</sup>れ<sup>キ</sup>バ

日<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>や<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>夜<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>ど<sup>キ</sup>一<sup>キ</sup>旦<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>カ<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>換<sup>キ</sup>  
く<sup>キ</sup>知<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>事<sup>キ</sup>な<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>十<sup>キ</sup>六<sup>キ</sup>人<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>た  
お<sup>キ</sup>後<sup>キ</sup>より<sup>キ</sup>走<sup>キ</sup>り<sup>キ</sup>く<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>名<sup>キ</sup>夜<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>車<sup>キ</sup>に<sup>キ</sup>載<sup>キ</sup>  
とおめ<sup>キ</sup>ひ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>り<sup>キ</sup>か<sup>キ</sup>り<sup>キ</sup>大<sup>キ</sup>別<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>目<sup>キ</sup>社<sup>キ</sup>社<sup>キ</sup>也<sup>キ</sup>言  
な<sup>キ</sup>れ<sup>キ</sup>バ<sup>キ</sup>お<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>せ<sup>キ</sup>ん<sup>キ</sup>アラ<sup>キ</sup>コ<sup>キ</sup>ト<sup>キ</sup>一<sup>キ</sup>人<sup>キ</sup>く<sup>キ</sup>や<sup>キ</sup>春<sup>キ</sup>  
を<sup>キ</sup>推<sup>キ</sup>し<sup>キ</sup>窓<sup>キ</sup>倒<sup>キ</sup>し<sup>キ</sup>遊<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>一<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>く<sup>キ</sup>ハ<sup>キ</sup>な<sup>キ</sup>げ<sup>キ</sup>也<sup>キ</sup>言  
ま<sup>キ</sup>ね<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>け<sup>キ</sup>我<sup>キ</sup>光<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>よ<sup>キ</sup>れ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>り<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>祈<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>ん<sup>キ</sup>ぬ  
ひ<sup>キ</sup>中<sup>キ</sup>く<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>カ<sup>キ</sup>ラ<sup>キ</sup>叶<sup>キ</sup>ひ<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>わ<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>ん<sup>キ</sup>弟<sup>キ</sup>光<sup>キ</sup>公<sup>キ</sup>

道とある所へと遊げぬ人様もあつた  
後身うらやま抱かれば陰言もく如思  
五りん我を頼まじし宣ひて例へて人思  
丁島の櫻の本有らるるこゝに有るを  
引故ーヤさんと引かぬはともなうと有る  
夕を漁るゝとせんを一様はあつた  
根自丁島と振られれば社もあつた  
そゝゆゑ故ー道なり弟光公清持操斜

な。限一と仰せむをわててるわつた  
和傳より海傳とては第ひあつた  
去年千牛堂の歌ひは勝るゝ味方  
の兵をたてしもき人ちりりて返一け  
るも在理ちとて宣ひ初海傳と有れ  
とらへは應美物一更より年外道も他  
國連海傳とて大力の者とは傳へ  
らる



出羽大平記卷之三終

65950



山形県立図書館



1-0336088-3